

<研究会報告>

社会科の当面する諸問題

宮 蘭 衛<sup>\*</sup>  
山 本 栄 一<sup>\*\*</sup>  
古 山 良 平<sup>\*\*\*</sup>

A. 「歴史教育」は若者の問題意識に答えているか

1. 「世界史」必修論から「歴史教育」の問題を考える

「世界史離れ」の問題が、ここ2,3年新聞等で盛んに論じられている。それを受けるかのように、去る11月13日、教育課程審議会高校分科会は、「世界史」必修案を打ち出した。この問題を論じるのがここでの課題ではないが、「世界史」必修論の背景にある問題点を明らかにすることから始めたい。そこに、今日の高校「歴史教育」、更には「社会科」全体の直面する問題が凝縮されていると考えるからである。

「国際化の時代に対応し」、「世界史離れ」を防ぐためには、「世界史」を必修にすべきだというのが、必修論者の主張のようである。確かに、世界史的視野が求められている。だが、「世界史」を必修にすれば、「世界史離れ」が無くなると考えるのは、余りにも楽観的過ぎはしないか。何故ならば、「世界史離れ」以上に、「世界史離し」という側面が大きいと考えるからである。ここで今少し、「世界史離れ」の意味を考えてみたい。

「世界史の新しいイメージがいつこうに伝わってこない」(『読売新聞』1987.11.17「社説」)というのが、現在の「世界史」に対する大方の感想であろう。「世界史『学』」なるものは、未だ確立されているとは言い難い。また現場でも、「『生きるということの意欲』につながるような世界史学習の内容と方法」(二谷貞夫「世界史教育をどう考えるか(Ⅰ)」『筑波社会科学研究』1985.第4号, p.77)を十分に吟味し、生徒を「世界史」に引き付ける努力がなされてきたか。生徒の問題意識を手がかりに、彼ら自身による「世界史像」の形成を目指す取り組みは十分とは言えない。ここに根本的な問題がある。

つまり、「世界史」から生徒を「離す」状況を、先ず反省すべきではないのか。覚える事項が多いという理由で、生徒は「世界史離れ」をしている。従って、必修にしても、生徒が「世界史」

\* 筑波大学大学院博士課程  
\*\* 神奈川県立秦野南が丘高校  
\*\*\* 東京学芸大学附属高等学校

の学習に「のってくる」とは限らない。生徒の問題意識を見つめ、彼らの生きかたに関わるような学習を取り戻すことが、何よりも急務である。

## 2 「歴史教育」の問題＝「歴史離し」

「世界史離し」の問題に見られるように、現在の「歴史教育」の抱える問題の一つは、生徒に対する「歴史離し」にあると考える。

現代の若者（ここでは一応、中学・高校・大学生を含むものとして捉える）は、社会に「無関心」だと言われる。確かにそのように見える。しかし、ただ単に、「無関心」であるとレッテルを貼るだけでは問題は解決しないし、現に、彼らが社会への関心や社会を見ようとする姿勢を、完全に失っているとは言えない。

この春、高校を卒業したばかりの短大生（60名）に、「私の生きる現代社会」というテーマで作文を書いてもらった。「現代社会は、多くの面で乱れているが、その乱れが何のためなのか私にはよくわからない」とか、「問題を挙げればきりがないほどある。だが、今のところは直接かわりがないので、関係ないような気がする」という意見が多く見られた。これこそ、若者の社会への「無関心」さを表している、と言われるかもしれない。だが、この意見を、『『今』の日本をつつむこの得体の知れない粘体のような空気を、もっとも敏感に呼吸している』（日高六郎『戦後思想を考える』岩波新書、1985年）彼女たちの、現代社会に対する日常的・感覚的な問題意識の表明と見ることも可能である。混沌とした状況に対して、素直に「よくわからない」と述べることで、自己の存在の基盤が明確でないことを訴えている。

問題は、現在の高校「社会科」、特に「歴史教育」において、社会に対する生徒の素直な問題意識を汲みとり、日常的・感覚的な問題意識をより高めるとともに、社会を見る目を育てる努力が、十分になされていないということである。

昨年4月、鈴木亮氏が、ある大学で高校時代の歴史学習の実態調査を行った所、57名の学生のうち28名が「第二次大戦史」を、そして36名が「戦後史」を一時間も学んでいなかった。（鈴木亮『ちからを伸ばす 世界史の授業』日本書籍、1987年、p.13）では、高校生は、「第二次大戦史」や「戦後史」に関心を持っていないのだろうか。現実には、逆ではないのか。むしろ、彼らはそれらに関心を持っており、教師がその関心の芽を摘んでいる一面がある。

### 3. 自らの問題意識や意見を表明する「場」を求める中・高校生

ここに、『南日本新聞』という地方紙の投書欄(「若い目」)の記事がある。(資料1)

今年3月には、ひと月で10通程の戦争に関する投書が、中・高校生から寄せられている。その他にも、現在の政治・環境問題などに関する投書がある。彼らは、現代社会の問題に関心を示している。しかもその中で、お互いの意見を交換し、且つ、大人(ここでは教師と置き換えてもよい)に自分の問題意識を理解して欲しいと訴えかけている。

例えば、3月15日の「若い目」には、戦争に関する2つの投書が掲載されている。一つは、女子高校生の「戦争を教えて」という訴えである。戦争を知らない世代であるが故に、もっと戦争の実態を学びたいと言うのである。もう一人の女子中学生は、「今の世の中が怖い」と、防衛費1%枠突破の問題、国家機密法などの動きの中に感じた、戦争の危機を訴えている。

これらの投書から何を讀みとるべきか。一つは、彼らが、「第二次大戦史」や「戦後史」に対して関心を持っている、或はその芽を持っているということである。それは彼らが戦争を「過去」のものとしてではなく、「近未来」のものとして感じていることを意味しているのではないか。例えば、そのような意識は最近の少年マンガの中にも見られる。「北斗の拳」などは、核戦争後の社会を描いたものである。これらのマンガに人気があるということ自体、それを受け入れる意識が中・高校生の中にあるということである。だからこそ、そのような問題意識に基づいて、今日の社会の問題の背景や原因を知りたいと訴えかけているのであろう。

高校「歴史教育」は、「第二次大戦史」や「戦後史」を軽視している。だが、それは生徒が生活の中で感じている問題意識を切り捨ててを意味する。その事実気づくべきである。

次に、彼らは自分の問題意識を表明し、意見を交換する「場」・「空間」を求めているということである。ここでは、新聞の投書欄が積極的にその役割を果たしている。「若い目」は、一般の投書欄の中に別枠で設けられている。若者(特に中・高校生)だけの特別な「空間」、即ち彼らを受け入れてくれる「場」が確保されているのである。そのために、この「若い目」は、最近言われる若者の<失われたことば>を回復するための「場」・「空間」としての機能も果たしていると言える。

学校という枠の中では「しらけ」、「無気力」・「無関心」と見られている彼らが、その外では積極的な「場」作りに参加しているという一面から、「社会科」が学ぶべきことがありはしないか。

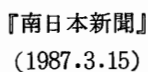
### 4. 「社会科」における「建前」と「本音」を見抜く若者＝「社会科離れ」の原因

このような「歴史離れ」の背景には、「本音」と「建前」の使い分けの問題があろう。それが、

先頃、大学3年生（社会科専修）に、岸田秀の「戸塚ヨットスクールと戦後教育」（『嫉妬の時代』飛鳥新社、1987年）という評論の一部分についての感想を聞いてみた。「今日の教育のゆがみ・歪みは、戦後民主主義教育がもたらした、教育する側の嘘と自己欺瞞が原因である」、というのがその部分の論旨である。例えば、学校教育は社会のために子供に嫌なことを押しつける加害行為であるのに、子供のためであるかのように振る舞っている。（岸田、p.59）これが、今日の教育荒廃の原因であるという。

それを見抜いているが故に、「本音」で社会(教師)に対する高校生にとって、「社会科」は魅力のないものになる。ここに、「社会科離し」と「社会科離れ」に導く要因があるろう。

\*例会（5月30日）での発表内容に、今回の「世界史」必修の問題を関連づけて書いた。そのため、発表内容に加筆・修正した。その点をお詫びします。（1987.11.17稿）（宮蘭）



以上よく知りませんが、日本以上にくだらないではないでしょうか。  
 ここで、私が一つ疑問に思うことは、言いかえるならば、「ふ」に落ちた金のことというのは、今日の軍事情況、すなわち防衛費の行き先です。防衛費は、私たちの両親が払う税金でまかなわれています。私たちの両親は戦時税やミサイルを買ったのに毎年、何兆円にもなる税金を払っているわけではありません。確かに、自らの母国を守ることは大事です。しかし、いくら守るからといって、相手の血を見るような守り方をしてよいのでしょうか。  
 四十年前のあの悲劇をくり返してははいらないと思います。いえ、くり返してはならないのです。そのために戦艦ミサイルを一枚、ミサイルを一発買おうのむくひを、そのお金で少しでも国交を多くするとか、ほかの国の戦争被害者の援護をするとか、そんなささいなことでもいいから、日本が少しでも他の国から「日本は本当にすてきな国」と言われるように、もっともっと努力してはいいと思います。  
 (日置部)

## B. 生徒の多様化に即した「現代社会」の創造

### 1. はじめに

10月28日の新聞に報じられた「世界史」必修の動きに対し、世界史を自分の専門と思い込んでいる(?)者の1人として、大変な嬉しさと同時に戸惑いを感じざるを得なかった。歴史独立論に対する危惧は他の機会に譲るとして、直面した悩みとしては、ローマと言っても、その場所がどこかわからないばかりではなく、その言葉が、都市名か、国名か、人名かの区別のつかない多くの生徒たちを前にして、どうやったら授業が展開できるかということである。

最近の本学会の研究発表をみると、教育行政の問題、社会科教育の理念の問題、大学附属高校等の高学力生徒を対象とした実践例などに片寄り、現実・一般的な生徒不在の議論が多かったように思われる。今回の発表はこの点を意識しつつ、学力の低い生徒を預かる学校の現状と問題点を整理することを通じて、今後の研究のあり方の一方向を示す意味で行なわせていただいた。

### 2. 生徒の多様化による教育上の諸問題とその対応策

#### (1) 基礎知識の不足

先に述べた「ローマ」の事例のような、社会科としての基礎知識不足以前のこととしてまず、教科書の漢字が読めない、言葉の意味がわからないという現実がある。15行の1段落のうち、10箇所以上漢字でつかえているのでは、社会科の学習以前に勉強のやる気を削いでしまうのは当然である。この状況に配慮した記述方式の教科書・資料集を早急に作る必要があり、取り上げるトピックも、生徒に身近で、問題意識に富んだ具体的な話題を精選することが大切である。

#### (2) 考えをまとめる能力の不足

教師の発問に対する生徒の答えは「わかりません」の一言や、単語だけボツリと答えることが非常に多い。これは、発問の仕方の悪さや、生徒の無気力ということだけで起こる問題ではなく、「人の話の聞き方→自分なりのまとめ方→わかりやすい伝え方」の、コミュニケーションの3技術を、高校までの学校教育の中で、実際に手ほどきされることがほとんどなかったためではないだろうか。社会科は暗記という、一般的風潮も、これを助長してきた一因と考えられる。

#### (3) 社会性の発達の未熟

清掃の時間を例にとると、教師の「君は箒、君は黒枚消し……」という助けなしには、生徒は整然と行なうことがむずかしいというような、ある意味で幼稚な面が多々認められる。社会の授業が、生徒の社会性を形成する有効な一手段となるような、生活に即した教材・教育法を導入することが大切である。

#### (4) 集団構成能力の不足

(3)に関連してだが、生徒は自らリーダーを選出し、それを育て、自分達で秩序を作り問題を解決できる集団を作る力がほとんどない。初めは教師が意図的にリーダーを育成し、リーダーの真の意味での有用性を全員に実体験させることにより、生徒が自ら集団秩序を生み出せるように手ほどきする必要がある。その一助として、模擬会議や班による作業を取り入れた授業展開を工夫することが有効と考えられる。

#### (5) 知的好奇心の低下

教材の内容が意義深いものであれば、生徒が食らいつくというのは真理だが、現実には学問的・社会的意義と生徒の好奇心は一致しないことが多い。人権よりもバイク、芸能界の方が楽しいに決まっている生徒たちに、授業内容に興味を抱かせるのは至難の技だが、話に入り込むきっかけさえつかめれば、話の展開の仕方、生徒はかなりの内容にまで付いてくる。したがって、話のきっかけとなる生徒たちの"好奇心の芽生え"がいったい何なのかを、より突っ込んで研究する必要がある。

#### (6) 集中の持続力の不足

生徒の集中力の持続時間は15分程度であり、飽きてしまった時、自分をコントロールする力の弱い生徒を預かる授業も大変である。すべての高校で、一律に50分6校時の授業を課すこと自体、検討を要することであろうが、まずすべきことは、この「飽き」という要素を考慮した、一時間・一日の授業構成の研究ではないだろうか。

#### (7) 教師の指導に不応

授業以前の問題として、授業中の立ち歩き、ガム、ウォークマンといったことに悩まされている高校が、学区に1つや2つは必ずあると聞いている。本学会では、いままでこの問題をタブー視していたような感があるが、「社会科」を通して、この現状にどう対処できるのか、どうしたら正義の意志を啓発できるのかという問題に、正面から取り組む必要に迫られているように思われる。

### 3. 問題点を踏まえた授業のあり方＝「現代社会」との関わりを踏まえて

2.で示した問題点に対し、現代社会は非常に有効な科目と言えよう。なぜなら、生徒の身近で具体的な話題・事件から本質的な内容へと話を導きやすいし、何のために勉強しているのか、どのような意義があるのかを、比較的はっきり打ち出しやすい特性を備えているからである。特に2の(3)、(4)で示した点については、クラスで発生した問題を、すぐに教材として編成することができるので、「現代社会＝生活が教材である」という姿勢で臨めば、斬新で有意義な授業が

期待できる。

#### 4. 実践例

クラスで起こったある事件をきっかけとして、授業の中で「ホームルームは偶然にふり分けられた集まりにすぎないという考え方があるが、それでよいだろうか」という作文を課し、続けて討論会を行なったが、スペースの関係上、具体的報告は省略する。

#### 5. まとめ

生徒の多様化に伴って、さまざまな問題が発生していることは周知のことであるが、その原因の分析がおろそかであったり、現状分析にとどまっていたり、研究成果が"教材"という形で現場に還元されることは、これまで少なかったように思える。このことをふまえて、今後本学会も実践研究を強化し、現状に即した教材の開発を行なうべきである。具体的な方向としては、実践例を集めて体系化すること、現場で使える資料集を編集することなどが考えられよう。(山本)

### C. 『現代社会』の取扱方の一例としての『食糧問題』の指導

従来から第1編(現代社会の基本的な問題の認識)と第2編(人間としての主体的な生き方の探求)相互間の有機的な関連性を保った取扱方の難しさが指摘されてきた。ここでは、敢えて第1編・第2編の枠を取り払い、「倫理性の欠如」という統一的な視点のもとに全編を再構成する試みの取り掛かりとして、『食糧問題』を取り上げてみる。

#### 1. 年間指導計画(1年・週3時間必修)

##### (1) 文化と青年

現在抱えている切実な悩み、青年期の意味、社会化と個性化、責任ある自己、文化と人間形成、極限の民族、ハレとケ、日本人のアイデンティティー、大衆社会と文化。

##### (2) 現代に生きる倫理

考える葦、倫理・科学・哲学・宗教・芸術との関連性、ソクラテスと善く生きること、キリスト教と仏教に於ける関係的存在としての人間、実存主義と主体的自己の確立。

##### (3) 民主社会の課題

全体の状況判断と応答、自由と責任・権利と義務の表裏一体の関係。

#### (4) 現代と人間

機械化と人間疎外，自然開発と生態系，南北問題と人口・資源エネルギー

#### (5) 現代の経済社会と国民福祉

科学技術の発達と現代の経済生活，日本経済の特質と国際化，経済の調和ある発展と福祉の実現

#### (6) 現代の民主政治と国際社会

日本国憲法と国民生活，民主政治，国際平和

## 2. 学習上の留意点

「倫理性の欠如」という視点で，「現代社会」各分野を整理してみると次のようになる。「社会的分野」→機械化・人間関係の稀薄化・主体性の喪失。「経済的分野」→不等価交換・南北問題。「政治的分野」→パワーポリティックス・人間性抑圧。「文化的分野」→自民族中心主義。「青年期分野」→否定的同一性。「倫理的分野」→主観的絶対主義。

また，成長の主体・学習の主体としての青年が，いかにして当事者能力を養い，責任ある人格の主体となり得るかを共に考える。一例として，人口爆発や食糧危機の問題を考えてみる。目的としての人口を養うには食糧の十分な生産性が保障されねばならない。だが，従来の食糧の生産性向上の在り方は，国際分業の利益を求めての海外への輸入依存であったり，農薬や化学肥料の多投であったりした。しかし，それらは結果として国内の食糧自給率を低下させたり，土中の微生物を殺し，自然界の物質循環を断ち切り，地力を低下させたりして，むしろ食糧の生産性を低下させた。もうけ主義の資本の論理は，倫理性の欠如した掠奪農法に結び付いたが，それはかえって自然と人間の両方を衰退させる。ゴミの大規模なコンポスト化（堆肥化）や有機農業の実用化・或いは産直運動の推進や流通機構の改善・資源浪費型の物質文明社会の生活様式の反省といったことが，急務の研究課題ではなかろうか。

## 3. 「食糧」単元の展開例

- ①→油漬け，薬漬け等の，自然界の生態系を無視した農業の工業化の状況の認識（資本の論理，流通制度，トロ神話・霜降り神話等の様な消費者の好み，外食産業等の問題）。
- ②→人口問題と関連させながら，背景としての南北問題・耕地面積の限界・土壌侵食・量の確保・質の安全等の検討。
- ③→資源浪費型の物質文明社会の経済構造並びに消費生活様式の認識と反省。
- ④→資源のリサイクリング，都市ゴミのコンポスト化，大規模な有機農法の実用化，産地直送



運動等の検討等が考えられる。

#### 4. 「現代社会」各中項目の「食糧」関連項目

社会認識と個人認識の有機的な連結を図る為に、「倫理性の欠如とその克服」の視点から、「現代社会」各中項目の「食糧」関連項目を挙げておく。

- I. 文化と青年→風土論、モンスーン型、火山地帯の酸性土壌と畑作不適による飼料全面輸入、小型複合農業（休閒農業と中耕農業）、大規模機械化粗放的経営の不適性、機械万能幻想、操作人間（アイデンティティー不全症状）、インスタント文化とインスタント食品、ハレの食事の常態化、劣等財と文化価値、拒食症、残酷とは何か。
- II. 現代に生きる倫理→資本の論理と人間疎外、近代主観主義、科学的思考と哲学的思考、宗教の世俗化、生命への畏敬、断食とサチャグラハ、自然との共存。
- III. 民主社会の課題→当事者能力、相手の立場（為政者・発展途上国の人々）に身を置く、情報選択能力と主体的決断、豊かな環境を後代に残す責任。
- IV. 現代と人間→高度大衆消費社会、インスタント文化・コピー文化、消費者の好みと外食産業、画一性、営利性、流行性、宇宙船地球号、粗食と飽食、焼き畑、過放牧、温室効果、オゾン層の破壊、緑の革命の失敗、灌漑農業、塩類土化、農業の工業化〔機械化の極としての野菜工場（水耕栽培）〕。
- V. 現代の経済社会と国民福祉→農業基本法農政、ケインズ政策、国土総合開発、工業基地化、加工貿易立国（資源小国日本）、国際分業論、油漬け・菜漬け、配合飼料メーカーとしての農協、食品添加物と消費者問題・公害病、補助金行政、機械化貧乏、農林族議員、食料管理制度、石油ショック、赤字国債、新自由主義、新国富論（保護か自由化か）。
- VI. 現代の民主政治と国際社会→自給率向上、ECの共通農業政策、国家主権の維持、食糧安全保障、アメリカの穀物戦略、リンケージ・ポリティックス、アグリビジネス（穀物メジャー）、フィリピンバナナ、エネルギー戦略、自衛隊、リムバック。（古山）